

「子守歌」

人間学部保育学科 持 田 篤

このところ、子供のいじめ、自殺が相続いて世間を賑わしている。かつて私はある幼稚園で講演をさせてもらう機会を得た。二十人ほどのお母さん方に問うてみた。「皆さん方はお子さんに子守歌を歌ってあげたことがありますか」云うまでもなく“子守歌”は子供を寝かしつける歌のことである。別名をゆりかごの歌とも云う。シューベルトや、ブラームスやモーツァルトの子守歌はあまりにも有名である。おそらく数ある音楽の中で一番数の多いジャンルだと思う。

さて先程の問いの答えだが、ほとんどのお母さん方も、先生も歌ってあげたことがないとのことである。日本の子守歌でも

「ねんねんころりよおころりよ、坊やは良い子だねんねしな」は誰でも知っている。何も子守歌でなくてもよいのである。童謡やわらべ歌でも演歌でもよいのである。子供はお母さんの匂いと温かい肌に抱かれて、お母さんのこの上ない優しい声に安心して眠りにつくのである。「『私は音痴だから』『歌が下手だから』と云わないで、世のお母さん方、もっともっと子供に子守歌を歌ってあげて下さい。そうすれば子供とお母さんの結びつきが深まり、子供の精神的な成長に役立つことでしょう。それは思いもよらぬ精神的な療法となって子供の成長に大いに役立つこととなるでしょう。お母さんの子守歌は子供への恋歌でもあると思うのです。そして初めての母子の対話でもあり、初めてのコミュニケーションでもあり、ここに人の事を思いやる仁愛の精神が生まれ、子供のいじめ、自殺は母親の愛不足からきていると思うのであります。世のお母さま方、もっともっと子供に子守歌を歌ってあげて下さい。お母さんの歌声は子供に想像以上のゆとりと安心感を与えると信じます。」とお話をした。

ところで四月二十六日の毎日新聞の朝刊でも政府の教育再生会議は「親学に関する提言」として、子守歌を聞かせ、母乳で育児せよ報道していた。

零戦に向かう兵士が最後に叫んだのは、お母さん！だったと聞いている。母の存在は偉大なのである。いつでも、どこでも話し合える家庭を築き上げてゆけば、もちろんその中心は幼なき日優しく子守歌を歌ってくれた母親である。そうしていればいじめや自殺も減るのではないかと思う。私は渡独（ソ連回り）の際、いつまでもいつまでもナホトカ行の船のテープを離さなかった母親の温かさを忘れることが出来ない。以上。